



農作業メモ

果樹の整枝・剪定

冬季の整枝・剪定作業は果樹の栽培管理の中でも重要な作業の一つです。難しい作業と思われがちですが、実際に切ってみて、その後の生育を観察すると、これを毎年くり返すことによってコツがつかめてくるものです。

1 基本的な樹形

立木仕立ての主な樹形として、主幹形、変則主幹形、開心自然形などがあります(図1)。カキやクリなどでは変則主幹形(幼木期は主幹形)、モモやウメ、カンキツでは開心自然形が多くなっています。主幹形はリンゴのわい化栽培の他、変則主幹形や開心自然形への途中経過の樹

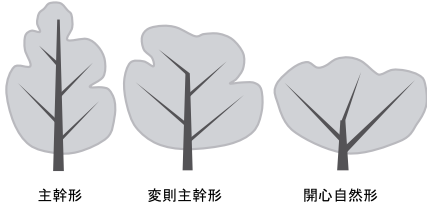


図1 主な樹形

形として使われます。

2 2つの切り方

基本的な切り方として、次の2つの方法があります。

(1) 切り返し剪定

枝の途中で切り返す方法です。先端を強く伸ばして骨格となる枝を育てたり、先端が下垂して弱ってきた枝の勢いを回復させる場合などに行います。枝葉を元気に伸ばす切り方です。

(2) 間引き剪定

枝を基部から切り落とす方法です。枝数を減らして樹全体に光を当てる場合などに用います。切り返し剪定に比べて、樹が落ち着き、一般的に花芽の着生も良くなります。

この「切り返し剪定」と「間引き剪定」を組み合わせて剪定作業を進めていきます。

3 剪定の手順

まずは樹全体を観察します。目標とする樹形のイメージを重ねて、骨格となる枝(主枝、亜主枝)の配置を確認します。

現地では骨格枝と結果枝(実をならす枝)が区別されていない樹が多く見られます。まず、どの枝を骨格枝として育成するのかを決めることが大切です。

また、それぞれの枝の強さのバランスも重要です。主枝が最も強く、次いで亜主枝、側枝、結果枝の順に弱くなっていくようにします。そのため、骨格枝はまっすぐ伸びるように切り返して強く保ち、分岐することがないように競合する枝は基部から間引きます。

実際の剪定作業では、まずは太い枝の間引きから始め、骨格枝の先端を切り返し、側枝、結果枝等の間引き、切り返しを行います。

4 主な樹種の結果習性

樹種ごとの果実の成り方を結果習性と言います。結果習性は、結果枝型と結果母枝型の2つに分けられます。

モモ、リンゴ、ウメなどは冬場に確認できる花芽に直接実を成らせる結果枝型、カキ、クリ、キウイフルーツなどは春先に伸び始めた枝に花を咲かせ、

実を成らせる結果母枝型です。

カキでは充実した冬枝の先端花芽に翌年の花を含んだ花芽を持つことが多く、この先端部分を切り返してしまうと翌年の結果部を切り落とすことになるので注意が必要です(図2)。

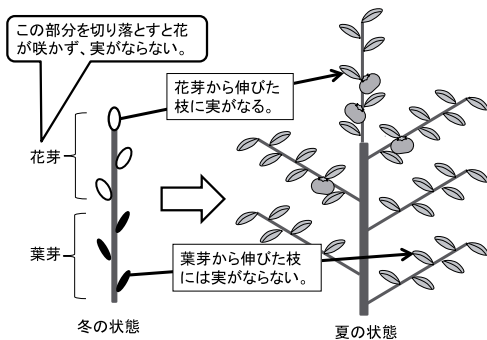


図2 カキの結果習性

5 その他

太い枝を切り落とすと切り口から枯れ込む恐れがあります。太い枝を切り落とすときは、切り落とす枝の基部を長く残さない、癒合促進剤を塗るなどして、切り口を保護します。